
大地はそこに

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大地はそこに

【Nコード】

N4204V

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

オーストラリアに來た日本人の老夫婦。その彼等が案内された場所はアボリジニのいる場所で。アボリジニの文化を勉強しながら書いた作品です。

第一章

大地はそこに

二人はオーストラリアに着いた。そこは。

「お洒落な街だよね」

「そうよね」

まずはシドニーの街を見てこう話すのだった。そこは近代的な街であった。流石にオーストラリア第一の都市と言われるだけはあるた。

「食べ物のお店も多いし」

「観光客用のお店も多いし」

「いい感じだね」

「ええ、本当にね」

こう二人で話すのだった。二人は日本から来た初老の夫婦だ。この国には観光旅行で来たのだ。見れば彼等のその周りにもだった。同じ様な感じのアジア系の人間が多い。彼等もまた。

「日本人多いね」

「そうね。話には聞いていたけれど」

日本人の観光客達だった。彼等だけではないのだ。

「こんなに多いと何か」

「日本語も通じそうだし」

「日本にいるのと何か」

「変わらないかしら」

こんなことも考えた。そしてその予想は。見事に当たった。何とだ。

彼等に対してだ。日本語で声がかかったのだ。

「ねえそこのお二人さん」

「あれっ、日本語だね」

「しかも流暢な」

「ガイドさん欲しくないかい？」

声の方を見ればだ。黒い髪に高い鼻の白人の男がいた。彼が明るい顔で二人に声をかけてきているのだ。

「安くしとくよ。どう？」

「ガイドさんかあ」

「そういえばいなかったわね」

二人もそのことにだ。今更ながら気付くのだった。

「二人だけで来たし」

「そうした人は」

「それはいけません」

ガイドさんは気さくに笑ってこう夫婦にまた言った。

「現地にはです。ちゃんとです」

「ガイドさんが必要なんだね」

「そうなのね」

「そうです。お安くしておきますよ」

何処か胡散臭い感じで言うガイドさんだった。

「どうされますか、それでは」

「どれ位？それで」

「どれだけかしら」

二人はその雇う費用を尋ねた。すると確かに安かった。しかもちやんとそうした仕事の許可証、日本語訳まで見せてもらってた。そのガイドさんを雇うことにしたのだった。

ガイドさんはだ。二人と契約を交えさせてからだ。早速こんなことを話すのであった。

「実はですね」

「実は？」

「といたしますと？」

「シドニーよりもですね」

彼等がいるその街自体のことを話すのだった。

「オーストラリアにはオーストラリアらしい場所がありますよ」

「オーストラリアらしい」

「そうした場所がですか」

「街を離れますか？」

こう夫婦に提案もするのだった。

「どうされますか？」

「というとあれですか」

「オーストラリアの自然にですか」

「カンガルーやコアラを」

「野生動物をですか？」

「あつ、それでもないです」

オーストラリアの観光資源の一つでもある。オーストラリアにだけいる独特の動物達でもないというのだ。有袋類はこの国のシンボルでもある。

「また違います」

「違うんですか」

「じゃあ一体？」

「何処に案内してくれるんですか？」

「それですと」

「村です」

ガイドさんはまずそこだというのだった。

「村に行きます？」

「村!？」

「村ですか」

「はい、村です」

こうだ。日本人の夫婦に対してにこりとして話すのだった。

第二章

「村というよりは集落と言っていていいかも知れませんが」

「集落、ですか」

「そうだった場所ですか」

「そこになのですか」

「はい、そこです」

また話すガイドさんだった。

「そこに行きます」

「オーストラリアに集落？」

「というと？」

「どういった場所ですか？」

「そこは」

「行けばわかりますよ」

そこがどういった場所かはだ。ガイドさんは話さなかった。しかしだ。それでもだ。ガイドさんは夫婦にこつも話した。

「オーストラリアがどういった国かもそれで」

「わかりますか」

「そこに行けばですか」

「はい、そこに行けばです」

ガイドさんは今はこう言うだけだった。そしてだ。

あらためてだ。夫婦にどうするかを尋ねた。

「では、そこに行かれますか？」

「その集落にですか」

「そこにですか」

「はい、若し行かれないのなら」

その場合はどうするかもだ。それを話すのだった。

「この街を案内させてもらいますが」

「このシドニーをですか」

「そこをですか」

「はい、そうさせてもらいます」

ガイドさんはその場合はそうするとだ。二人に説明する。

「どうされますか、それでは」

「そうですね。それでは」

「ここは」

夫婦は顔を見合わせてだ。そのうえで相談してだ。

そしてだ。二人の出した答えはだ。

その集落に行くことにした。二人の決断はそれであった。こうして彼等はガイドさんの運転するその車に乗ってだ。シドニーから離れたその集落に向かうのだった。

シドニーを出るとだ。赤い荒野がそこにあつた。そこは。

「まあ中央までは行かないですから」

「エアーズロック」

「そこまでなんですか」

「はい、そこまでは行きません」

そこではないとだ。中古の黒い日本車を運転しながら進む。

「シドニーからは近いです」

「車で行ける位の場所ですか」

「そこがなんですか」

「まあ全速力で向かってますしすぐです」

アスファルトの道をだ。実際にかなりのスピードで進んでいる。

「そこに行けばわかりますから」

「オーストラリアがですか」

「この国がですか」

「はい、わかります」

このことは話すのだった。オーストラリアがわかるということがだ。

「この国のことはです。この国はですね」

「オーストラリアは」

「どういった国か、ですか」

「シドニーとか海とか」

まず話すのはこの二つのことだった。

「それにカンガルーや羊ですね」

「よく聞きます」

「それで有名ですから」

「それも確かにオーストラリアなんですよ」

右ハンドルのその日本車を運転しながらの言葉である。

「けれど。他にもですね」

「あるんですね」

「オーストラリアが」

「昔からのこの国ですね」

あるのはだ。それだというのだ。

第三章

「それがありますから。そこには」

「わかりました。それでは」

「それを見させてもらいます」

「それじゃあですね」

ガイドさんは二人に笑顔で話す。顔は前を向いたままであるがそれでもだ。

「今から。行きます」

「はい、そこに」

「行きましょう」

二人も笑顔で頷く。そうしてであった。

三人が辿り着いた場所。そこは。

荒野の中にある岩山のだ。洞窟であった。その前に来たのだ。

その前に来てだ。まずは夫の方が言った。

「ここ、ですか」

「ここに何が？」

妻も言った。そこに何かあるのかだ。

「ええと、動物でもいるんですか？」

「この洞窟の中に」

「動物ではなく人間がいます」

ガイドさんはこう夫婦に話した。

「この洞窟の中にです」

「？人間がですか」

「洞窟に住んでいるんですか」

「あつ、こう思われましたね」

ガイドさんは二人の言葉を受けてだ。微笑んでこう話した。

「そんな。原始人みたいな話がまだあるのかって」

「はい、それは」

「幾ら何でも」

実際にその通りだった。二人はそう思った。しかしだった。

ガイドさんはだ。微笑んだままだ。二人にこう話すのだった。

「これは文化なのです」

「文化？」

「文化なのです、それは」

「そうです、文化です」

ガイドさんの言葉は変わらない。それはだった。

「こうした洞窟で生活するのも文化なのです」

「そういうものでしょうか」

「それは」

「私達が家に住むのと同じです」

それとだというのである。

「ですから」

「だからですか」

「それなのです」

「はい。では中に入ってみましょう」

夫婦に対して勧める。中に入ろうとだ。

「宜しいでしょうか」

「そうして中に住んでいる人に会ってですね」

「お話をですか」

「はい、それで宜しいでしょうか」

また尋ねてきたガイドさんだった。そうしてだ。

日本人の夫婦は実際に洞窟の中に入った。

洞窟の中は暗い。奥の方から薄い灯りが見える。その灯りから中に人がいることがわかる。その洞窟の中に三人で入ってからだ。

ガイドさんはだ。英語ではない言葉でだ。洞窟の奥に声をかけた。するとだ。

すぐにだその奥から返事が返ってきたのだった。

やはり同じ言葉だ。その言葉で、だった。

ガイドさんにだ。話すのだった。

やがて銀色の髪に黒い肌の痩せた人達がやって来た。彼等はだ。

「あつ、まさか」

「この人達は」

「あの。話に聞いています」

「オーストラリアに昔から住んでいる人達ですね」

「はい、アボリジニアンの人達です」

ガイドさんは日本語で二人に話した。

「この人達がです」

「アボリジニアン」

「この人達がですか」

「この人達は洞窟に住んでいる人達もいるんです」

それがだ。文化だというのである。

第四章

「この人達と。お話してみますか？」

「あの、言葉は」

夫はまずそのことを尋ねた。

「通じますか？」

「私が通訳できます」

ガイドさんは落ち着いた声で話した。

「ですから。ご安心下さい」

「そうですね。それでしたら」

「御願いできますか？」

夫だけでなく妻もここで尋ねた。

「それでは」

「それが仕事ですから」

それでいいというのだった。

「ですから」

「それでは御願いします」

「それなら」

夫婦も彼の言葉を受けて納得した顔で頷いた。そうしてだった。

話は決まった。そう見るとだ。

ガイドさんはだ。二人に対して今度はこんなことを言ってきた。

「それでは。場所を変えますか」

「場所をですか」

「ここではお話ししないんですか」

「はい、場所は」

ガイドさんはまた言葉を変えた。あのアボリジニアンの言葉でそのアボリジニアン達と話す。そうして少し話をしてからだだった。

あらためてだ。二人に顔を戻してこう話すのだった。

「外でどうでしょうか」

「洞窟の外で、ですか」

「お話をしたいと」

「美味しいものをご馳走したいとのことですよ」

「それでだ。外に出るといふのである。」

「ですから。どうでしょう」

「美味しいものですか」

「アボリジニアンの食べ物ですか」

「そうです。食べ物です」

料理とは言わない。食べ物であった。だが、だ。

食べ物と聞いて二人は少し表情を晴れやかなものにさせた。それまで異文化に触れていぶかしんでいた顔がだ。そうだった。

そのうえでだ。ガイドさんに対してこう述べた。

「それでは。その食べ物を」

「ご馳走させて下さい」

「甘いですよ。ですが」

「ですが？」

「ですが、ですか」

「驚かれると思います」

それがあるといふのだ。甘さと共にだ。ガイドさんは笑いながら話すのだった。

「きっとです」

「アボリジニアンの食べ物にですか」

「私達が驚くんですね」

「きっと。そうなりますね」

ガイドさんはだ。実に楽しそうに話す。それはさながら悪戯を仕込んでいる子供の様な。そうした楽しげなものであった。

その笑顔でだ。二人に言うのだった。そうしてだ。

三人はアボリジニアンの老人と共に洞窟を出た。この人が食べさせてくれるといふのだ。

それで四人で洞窟を出てだ。そうしてだった。

荒野を暫く歩く。やがて。

ある場所に辿り着いた。そこは。

そこも荒野だった。赤い荒涼たる、砂漠に近い大地がある。周りも赤い。さながら西部劇の様なその場所に來たのだった。

二人はだ。その周囲を見回しながらガイドさんに尋ねた。

「ここにその食べ物があるんですか？」

「ありますよ。ただ」

「ただ？」

「ただつていいますと」

「少し時間がかかります」

ガイドさんはこう二人に話すのだった。

「待つてくれますか？」

「ええ、それは」

「いいですけれど」

二人はあまり強くない言葉で答えた。

第五章

「それじゃあここで」

「待たせてもらいます」

「わかりました。それじゃあ」

こうしてだった。三人はその老人が食べ物を出すのを待つのだった。

老人はすぐにだ。そこで穴を掘りはじめた。それは結構な深さだった。

「あれっ、まだですか？」

「まだ掘るんですか？」

夫婦はだ。老人が自分の腰の辺りまで穴を掘ったのを見て驚いた顔で話した。何とそこまで掘るのにだ。瞬く間で進めたのである。

「もう腰まで掘ってますけれど」

「まだですか」

「はい、まだです」

ガイドさんはまた二人に話す。

「まだまだ掘りますよ」

「まだまだって」

「それじゃあ水が出ません？」

「そうですね。これだと」

「水が」

「ああ、日本じゃそうですね」

ガイドさんは夫婦の言葉を聞いてだ。笑顔で話すのだった。

「ある程度掘ったらそこから水が出るんですよね」

「ここじゃ違うんですか」

「オーストラリアは」

「残念ですがそうはいかないですよ」

ガイドさんは苦笑いになってだ。それで話すのだった。

「この国の大部分は乾燥してまして」

「そういえばここもですね」

「乾燥してますよね」

「はい、水には恵まれていません」

それがオーストラリアだというのだ。この国は確かに広い。しかしその大部分は乾燥しているのだ。中央部は砂漠になっている。

「それでかなり掘っても」

「水は出ないんですか」

「そうなんですか」

「人間で水を掘り出すのはかなり難しいですね」

そこまでだというのである。

「その点は日本が羨ましいですね」

「確かに。日本は水にはあまり困ってはいません」

「殆ど」

「ですよ。まあそういうことで」

ガイドさんはこのことを軽く話してからだ。それからだった。

あらためてだ。夫婦にこう話した。

「水ではないです」

「食べ物ですよね」

「それですよね」

「甘いですよ」

ガイドさんはまたこのことを話した。

「甘い食べ物です」

「甘い。お芋でしょうか」

「そうしたものですか？」

日本人の夫婦はそれではないかと考えた。地面の中にあるものだからだ。

それでだ。ガイドさんに対して自分から話した。

「オーストラリアでもジャガイモを食べますか」

「そうしますか」

「食べますよ、かなり」

それはその通りだというのだった。

「ですが」

「ここではないですか」

「ジャガイモじゃないですか」

「はい、ジャガイモは甘くないですし」

冗談も入れた。味覚の話もするのだった。

「ですから違います」

「そうですね。違いますか」

「じゃあ一体？」

「何でしょうか」

「甘いと聞いてますけれど」

「ですから。それはお楽しみです」

こう話すのだった。ガイドさんはあえて多くを話さなかった。

そのうえで老人が穴を掘っていくのを見守る。暫くするとだ。

老人がだ。満面の笑顔になってガイドさんに顔を向けてきた。既

に穴は老人の背丈と同じだけの高さになっている。そこからだった。

第六章

ガイドさんを見上げる形でだ。アボリジニアンの言葉で話す。

ガイドさんもその言葉でやり取りしてだ。そうしてだ。

夫婦にはだ。日本語でだ。満面の笑顔で話すのだった。

「いやあ、運がいいですね」

「運がいいですか？」

「そうですね」

「はい、運がいいです」

まただ。こう二人に話すのだった。

「いつもはこんなに早く見つからないんですか」

「見つからない？」

「見つからないといえますと」

「ええ、もつともつと深く掘らないと見つからないんですよ」

二人に対して笑顔で話し続けている。

「六ヤードは掘らないと」

「大体五メートルですよ」

夫が頭の中でヤードをメートルに換算して話した。

「それ位ですよ」

「はい、その位ですね」

「五メートルも掘らないと駄目だったんですか」

「けれど今回はすぐでした」

「こう話すのだった。」

「本当に」

「五メートルとは」

「そんなの掘らないと駄目だったんですか」

夫だけでなくだ。妻も怪訝な顔になって言うのだった。

「ううん、そこまでして食べるものとは」

「何なんですか？」

「はい、それはですね」

老人がだ。その足元から何かを取ってそれをガイドさんに手渡した。ガイドさんはその受け取ったものをすぐに二人に差し出した。それは。

「これです」

「！？それは」

「まさか」

見ればだ。蟻だった。しかし普通の蟻ではない。

尻のところからだ。橙色になって膨らんでいる。そこだけ宝石の様になっている。そうした変わった蟻だった。

ガイドさんはだ。その蟻を見て目を丸くする二人にだ。こう話すのだった。

「これはミツアリです」

「ミツアリ!？」

「それがその蟻の名前なんですか」

「正式にはミツツボアリといいます」

その名称も話される。

「オーストラリアの他に北米にもいましたね」

「そうですね」

「それがこの蟻の名前なんですか」

「はい、それで」

ガイドさんの話は続く。

「この蟻はですね」

「この蟻をまさか」

「食べるんですか？」

「はい、そうです」

ガイドさんは夫婦に笑顔で話した。

「この蟻がそのご馳走なんです」

「蟻を食べるんですか？」

「虫を」

「そうです。食べるのはこれです」

笑顔で話すガイドさんだった。

「美味しいんですよ、これは」

「まあ日本でも虫を食べますけれどね」

「それはありますけれど」

このことはだ。二人も認めた。

第七章

「イナゴとか蜂の子とか」

「食べますけれど」

「なら抵抗はないですね」

「ええ、まあ」

「私達も食べたことがありますし」

そうした経験はあるとだ。二人も話した。

「蜂の子でしたら」

「あります」

「なら問題はないですね。召し上がられますか？」

「それじゃあ」

「今から」

こう話してだった。そのうえでだ。

彼等はだ。少し戸惑いを見せながらもそのうえでも食べるのだった。そうしてだった。

彼等はミツアリを手に取って食べる。するとその味は。

「甘いですね」

「蜜の味がちゃんとしますね」

「はい、美味しいでしょう」

勿論ガイドさんも食べている。老人もだ。掘った穴に入ったまま食べている。

そうしながらだ。笑顔でいるのだった。

「これがご馳走なんですよ。この国の」

「滅多に食べられないものですね」

「本当にそうですね」

「そうです。手間もかかっていますし」

わざわざ掘ってだ。そうして手に入れたものだからだ。

「この人達はずっとこうして食べています」

「こうしたものをですか」
「ずっとなんですか」
「食べていつています。それでどうでしょうか」
「ガイドさんはふとだ。二人にこう尋ねた。」
「この味は」
「味ですか」
「蜜の味がしてとても甘いですね」
「そこに蟻の香ばしさもあって」
「とても」
「そこにさらにありますね」
「こうだ。二人に尋ねるのだった。」
「もう一つの味が」
「そうですね。何といいますか」
「この味は」
「はい、大地の味ですね」
「それだ。夫婦に話すのだった。」
「アボリジニアンの人達はずっと。この味と一緒になんですよ」
「大地の味ですか」
「それと」
「そうですね。ずっとずっと」
「そしてだ。さらに話すのだった。」
「ずっと一緒にいるんですよ」
「大地とですね」
「一緒にですか」
「そうして生きている人達も。オーストラリアにいますよ」
「また話すのだった。」
「それもまたオーストラリアなんですよ」
「この国はシドニーだけじゃない」
「羊だけじゃないんですね」
「はい、それも御覧になって頂きたかったのです」

これが彼が二人に見せたいことなのだった。まさにだ。それを話してだ。そのうえでだ。

「それでですけど」

「はい、それで」

「何でしょうか」

「アボリジニアンの食事や生活を。もっと知られますか」

こうだ。二人に提案するのだった。

「そうされますか」

「はい、それでは」

「是非」

二人はそのミツアリを食べながらガイドさんの言葉に頷くのだった。

そしてそのうえでだ。二人はガイドさんと共に老人と、アボリジニアンの食事を食べるのだった。それがまさにだ。大地であった。

大地はそこに 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4204v/>

大地はそこに

2011年8月2日03時28分発行